

## 雪　　女

武藏の國の或村に茂作、巳之吉と云ふ二人の木こりがゐた。この話のあつた時分には、茂作は老人であつた。そして、彼の年季奉公人であつた巳之吉は、十八の少年であつた。毎日、彼等は村から約二里離れた森へ一緒に出かけた。その森へ行く道に、越さねばならない大きな河がある。そして、渡し船がある。渡しのある處に度々、橋が架けられたが、その橋は洪水のある度毎に流された。河の溢れる時には、普通の橋では、その急流を防ぐ事はできない。

女

雪

茂作と巳之吉は或大層寒い晩、歸り途中で大吹雪に遇つた。渡し場に着いた、渡し守は船を河の向う側に残したままで、歸つた事が分つた。泳がれるやうな日ではなかつた。それで木こりは渡し守の小屋に避難した——避難處の見つかつた事を僥倖に思ひながら、小屋には火鉢はなかつた。火をたくべき場處もなかつた。窓のない一方口の、二疊敷の小屋であつた。茂作と巳之吉は戸をしめて、蓑をきて、休息するために横になつた。初めのうちは左程寒いとも感じなかつた。そして、嵐はちぎりに止むと思つた。

老人はちぎりに眠りについた。しかし、少年巳之吉は長い間、目をさましてゐて、恐ろしい風や

戸にあたる雪のたえない音を聽いてゐた。河はゴウゴウと鳴つてゐた。小屋は海上の和船のやうにゆれて、ミシミシ音がした。恐ろしい大吹雪であつた。空氣は一刻一刻、寒くなつて來た、そして、巳之吉は義の下でふるへてゐた。しかし、たうとう寒さにも拘らず、彼も亦寝込んだ。

彼は顔に夕立のやうに雪がかかるので眼がさめた。小屋の戸は無理押しに開かれてゐた。そして雪明かりで、部屋のうちには女、——全く白装束の女、——を見た。その女は芳作の上に屈んで、彼に彼女の息をふきかけてゐた、——そして彼女の息はあかるい白い煙のやうであつた。殆んど同時に巳之吉の方へ振り向いて、彼の上に屈んだ。彼は叫ぼうとしたが何の音も發する事ができなかつた。白衣の女は、彼の上に段々低く屈んで、しまひに彼女の顔は殆んど彼にふれるやうになつた、そして彼は——彼女の眼は恐ろしかつたが——彼女が大層綺麗である事を見た。しばらく彼女は彼を見續けてゐた、——それから彼女は微笑した、そしてささやいた、——『私は今ひとりの人のやうに、あなたをしようかと思つた。しかし、あなたを氣の毒だと思はずには居られない、——あなたは若いのだから。……あなたは美少年ね、巳之吉さん、もう私はあなたを害はしません。しかし、もしあなたが今夜見た事を誰かに——あなたの母さんにでも——云つたら、私に分ります、そして私、あなたを殺します。……覚えていらつしやい、私の云ふ事を』

さう云つて、向き直つて、彼女は戸口から出て行つた。その時、彼は自分の動ける事を知つて、飛び起きて、外を見た。しかし、女はどこにも見えなかつた。そして、雪は小屋の中へ烈しく吹きつけてゐた。巳之吉は戸をしめて、それに木の棒をいくつか立てかけてそれを支へた。彼は風

が戸を吹きとばしたのかと思つて見た、——彼は只夢を見てゐたかも知れないと思つた。それで入口の雪あかりの閃きを、白い女の形と思ひ違ひしたのかも知れないと思つた。しかしそれもたしかではなかつた。彼は茂作を呼んで見た。そして、老人が返事をしなかつたので驚いた。彼は暗がりへ手をやつて茂作の顔にさはつて見た。そして、それが氷である事が分つた。茂作は固くなつて死んでゐた。……

あけ方になつて吹雪は止んだ。そして日の出の後少ししてから、渡し守がその小屋に戻つた來た時、茂作の凍えた死體の側に、巳之吉が知覺を失うて倒れて居るのを發見した。巳之吉は直ちに介抱された、そして、すぐに正氣に歸つた、しかし、彼はその恐ろしい夜の寒さの結果、長い間病んでゐた。彼は又老人の死によつてひどく驚かされた。しかし、彼は白衣の女の現れた事については何も云はなかつた。再び、達者になるとすぐに、彼の職業に歸つた、——毎朝、獨りで森へ行き、夕方、木の束をもつて歸つた。彼の母は彼を助けてそれを賣つた。

翌年の冬の或晩、家に歸る途中、偶然同じ途を旅して居る一人の若い女に追ひついた。彼女は背の高い、ほつそりした少女で、大層綺麗であつた。そして巳之吉の挨拶に答へた。彼女の聲は歌ふ鳥の聲のやうに、彼の耳に愉快であつた。それから、彼は彼女と並んで歩いた、そして話をし出した。少女は名は「お雪」であると云つた。それからこの頃兩親共なくなつた事、それから

江戸へ行くつもりである事、そこに何軒か貧しい親類のある事、その人達は女中としての地位を見つけてくれるだらうと云ふ事など。巳之吉はすぐにこの知らない少女になつかしきを感じて來た。そして見れば見る程彼女が一層綺麗に見えた。彼は彼女に約束の夫があるかと聞いた、彼女は笑ひながら何の約束もないと答へた。それから、今度は、彼女の方で巳之吉は結婚して居るか、或は約束があるかと尋ねた、彼は彼女に、養ふべき母が一人あるが、お嫁の問題は、まだ自分が若いから、考へに上つた事はないと答へた。……こんな打明け話のあとで、彼等は長い間ものを云はないで歩いた、しかし諺にある通り『氣があれば眼も口ほどにものを云ひ』であつた。村に着く頃までに、彼等はお互に大層氣に入つてゐた。そして、その時巳之吉は暫く自分の家で休むやうにとお雪に云つた。彼女は暫くはにかなりためらつてゐたが、彼と共にそこへ行つた。そして彼の母は彼女を歓迎して、彼女のために暖かい食事を用意した。お雪の立居振舞は、そんなによかつたので、巳之吉の母は急に好きになつて、彼女に江戸への旅を延ばすやうに勧めた。そして自然の成行きとして、お雪は江戸へは遂に行かなかつた。彼女は「お嫁」としてその家にとどまつた。

お雪は大層よい嫁である事が分つた。巳之吉の母が死ぬやうになつた時——五年ばかりの後——彼女の最後の言葉は、彼女の嫁に對する愛情と賞讃の言葉であつた、——そしてお雪は巳之吉に男女十人の子供を生んだ、——皆綺麗な子供で色が非常に白かつた。

田舎の人々はお雪を、生れつき自分等と違つた不思議な人と考へた。大概の農夫の女は早く年を取る、しかしお雪は十人の子供の母となつたあとでも、始めて村へ来た日と同じやうに若くて、みづみづしく見えた。

或晩子供等が寝たあとで、お雪は行燈の光で針仕事をしてゐた。そして巳之吉は彼女を見つめながら云つた、——

『お前がさうして顔にあかりを受けて、針仕事をして居るのを見ると、わしが十八の少年の時遇つた不思議な事が思ひ出される。わしはその時、今のお前のやうに綺麗なそして色白な人を見た。全く、その女はお前にそっくりだつたよ』……

仕事から眼を上げないで、お雪は答へた、——

『その人の話をして頂戴。……どこでおあひになつたの』

そこで巳之吉は渡し守の小屋で過ごした恐ろしい夜の事を彼女に話した、——そして、ここにこしてささやきながら、自分の上に屈んだ白い女の事、——それから、茂作老人の物も云はずに死んだ事。そして彼は云つた、——

『眠つて居る時にでも起きて居る時にでも、お前のやうに綺麗な人を見たのはその時だけだ。勿論それは人間ぢやなかつた。そしてわしはその女が恐ろしかつた、——大變恐ろしかつた、——がその女は大變白かつた。……實際わしが見たのは夢であつたか、それとも雪女であつたか、分らないで居る』……

お雪は縫物を投げ捨てて立ち上つて巳之吉の坐つて居る處で、彼の上に屈んで、彼の顔に向けて叫んだ、——

『それは私、私、私でした。……それは雪でした。そしてその時あなたが、その事を一言でも云つたら、私はあなたを殺すと云ひました。……そこに眠つて居る子供等があるなかつたら、今すぐあなたを殺すのでした。でも今あなたは子供等を大事に大事になさる方がいい、もし子供等があなたに不平を云ふべき理由でもあつたら、私はそれ相當にあなたを扱ふつもりだから……』

彼女が叫んで居る最中、彼女の聲は細くなつて行つた、風の叫びのやうに、——それから彼女は輝いた白い霞となつて屋根の棟木の方へ上つて、それから煙出しの穴を通つてふるへながら出て行つた。……もう再び彼女は見られなかつた。

(田部隆次譯)

*Yuki-Omma. (Kwaidan)*